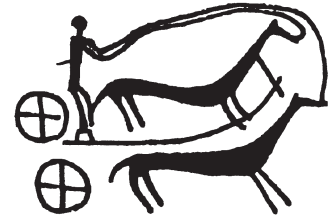


センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter No. 82



- ピア・サポートがスタート (4 ページ)
- 学習サポートが好評 (6 ページ)
- アイヌ語・アイヌ文化の授業に思うこと (14 ページ)
- UC バークリーでの GSI 制度 (14 ページ)
- インディアナ大学における学習・教育支援 (16 ページ)
- 北海道大学オープンコースウェア (22 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

コアカリキュラム・基礎教育・単位の実質化・FD の今後

文学研究科 教授・高等教育開発研究部長 安藤 厚

この3月をもって定年を迎え、センター長補佐の職を終えます。全学教育小委員長を4年、研究部長を4年、併せて教育改革室役員補佐を3年務め、平成13年度「進化するコアカリキュラム」、平成18年度新教育課程と単位の実質化の取り組み、次世代FDプログラムの開発などに関わってきました。この機会に、これらの取り組みの到達点と今後の課題を確認しておきたいと思います。

進化するコアカリキュラム

平成13年度コアカリキュラムの準備には、文学部の全学教育委員として関わりました。当初は「歴史の視座」「社会の認識」といった科目名にも多くの反発がありましたが、フィールド体験型演習、地

域連携型芸術科目、倫理科目、工学的創成実験、基礎科目における能動的学習、CALLによる外国語教育など多くの新しい取り組みが行われ、10年の歳月を経てすっかり定着しました。全学教育の倫理科目(科学技術倫理など)は大学院共通授業の応用倫理(企業倫理・組織倫理)に、練習船上の体験学習は水産学部1年次向けの専門科目「基礎乗船実習」に発展しました。

中教審「学士課程教育」答申(2008年12月)以来、「初年次教育」が注目されていますが、北大

では1995年の全学教育の開始以来、一般教育演習・総合科目・論文指導を新入生のための大学教育への導入教育として充実し、21世紀の教育目標として、①高いコミュニケーション能力、②社会や文化の多様性の理解、③独創的な思考力と建設的な批判能力、④社会的な責任と倫理の自覚を掲げてきました。また、2009年6月には「北海道大学教育倫理綱領」が制定されました。

「学士課程教育」答申では、「社会奉仕体験活動、フィールドワーク、インターンシップ、海外体験学習や短期留学等の体験活動」が特に推奨されています。北大では、特色GP「進化するコアカリキュラム」(2003～2006年度)、同「国際獣医学教育協力推進プログラム」(2004～2007)、現代GP「北方地域人間環境科学教育プログラム」(2004～2007)、教育GP「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」(2008～2010)などで、さまざまな体験型教育が発展しました。今後の課題としては、ポートランド州立大学の例を参考にしたCapstone型サービスマーケティング(高年次における体験学習)の拡充などが期待されます(センターニュースNo.75巻頭言など)。

平成18年度新教育課程と単位の実質化

平成18年度新教育課程の重点項目は、外国語科目の再編(外国語演習の拡充、英語・初習外国語におけるCALLオンライン授業の全面展開など)、文系基礎科目の新設、理科基礎科目における「専門系/準専門系」2コース制と「互換性科目」の導入、総合的「自然科学実験」、情報科目の刷新などでした。

新教育課程開始から4年を経て、現在その成果の中間報告書を編集しています。各科目責任者からの原稿によれば、刷新された多くの科目が着実に成果を上げはじめています。文系基礎科目など、問題の残っている科目については、平成23年度の総合入試導入に合わせて見直しが進められています。また、クリッカー、LMS/CMS(北大ELMSやMoodleなど)を活用した能動的学習の普及も進んでいます。

新教育課程と同時にはじまった「単位の実質化」の取り組みは、北大の学士課程教育に予想以上の大きな変化をもたらしました。成績評価基準(ガイドライン)の設定と明示・成績分布の公表・成績評価

の極端な片寄りの点検の開始(2003)、「秀」評価とGPA制度の導入(2005)をうけて、2006年度から1年次に履修登録単位数の上限設定(CAP制)が実施されました。当初は学生や教員から「とりたいた科目がとれない」「履修者数が激減した」という苦情が殺到する一方で、図書館北分館の入館者が急増し、理系基礎科目などでは、受講生の授業への取り組み姿勢が改善された、自習時間が増え、試験の成績も上がっている、文系科目でもレポートの質が目に見えて向上したなどの報告が聞こえてきました。2009年度からは、2年次以上についても大部分の学部で上限設定が実施されています。

その後、統計データによって、「単位の実質化」(授業改善と自習促進)の動向が次第に見えてきました。学生の1年次1学期の履修単位数の平均は、理系で約32→22単位、文系で25→20単位に減りました。同時に、全学教育科目の履修者総数は平成17～21年度で約25%減少しました。並行して、1年次の学期GPAの全体平均は、1学期2.23→2.40、2学期2.20→2.35に上昇しました。90分の授業1回あたりの自習時間の調査では、平成18年度1学期～21年度1学期の間に、自習時間「1時間」以下という回答の比率が78.4→76.1→74.0→70.2%と減少しました。20年度1学期までのデータでは、全学教育科目における自習時間は18年度以降大きな変化はありませんが、専門科目の講義における自習時間が、どの学部でも10～20%ほど増えています。これは18年度以降の入学者が高学年に進み多数を占めてゆくのに対応した変化と考えるなら、「自習」についての意識が18年度以降の入学者では、それ以前の学生より10～20%ほど向上していると理解できます。初年次の取り組みが、学年進行に伴って高年次にもよい影響を与えているとすれば幸いです。

なお、履修者数の減少に伴って、開講クラス数の調整が進み、全学教育における非常勤講師採用数の半減(2004年度710→2009年度353コマ)が達成されました。

次期中期目標・中期計画では、「教育効果を検証しつつ、単位の実質化を推進する」「GPA等に基づく厳格な卒業認定基準を全学において導入する」ことが計画されています。2009年度に「自由設計科目」制度が導入され、選択科目における「不可」などを

通算 GPA から除外できるようになりました。この制度を定着させ、データの変化に注目しながら、専門科目を含めて「単位の実質化」の取り組みを進めるなら、上記目標は確実に達成できると思われま

次世代 FD プログラム・北大の国際化・地域連携

「北大型」FD (新任教員研修会, 教育ワークショップ, TA 研修会) の十年の成果を踏まえて、次世代 FD プログラムの開発を進めています。「FD の義務化」により、各部局での FD が充実されていますので、教員の相互研修型の FD は各部局に任せることができます。国内外の事例調査、国際シンポジウム・ワークショップの経験から、全学センターとして次の十年の課題は、大学院における人材育成に焦点をあて、TA 研修の刷新と「北大型」Preparing Future Faculty (大学院生のティーチングとライティング能力の育成) プログラムの開発が重点項目になると考えています。この一年、国際化加速や英語授業のための FD 企画にかかわって、北大の国際化に対して本センターも、教員研修、大学院生の能力開発などで応分の貢献はできると思われま

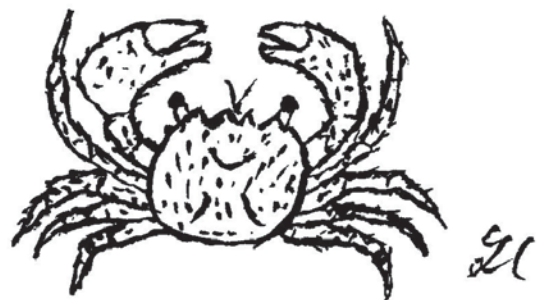
この一年、海外調査で韓国、シンガポール、米国の大学を訪ね、どこでも数十人のスタッフを擁するティーチング&ラーニングセンター (CTL) が活発に活動しているのに圧倒されました。データに基づいた教育改善という点では、大学全体のさまざまなデータが Warehouse の形で集約され、IR オフィスが必要な報告書を作成して評価活動が行われているのにも驚かされました。

次世代 FD の課題としては、講演会や教員の相

互研修型の FD と並行して、学習サポート、教育サポート機能の充実が急務です。幸い、前者についてはこの4月にアカデミック・サポートセンターが本格的な活動をはじめます。後者についても、教員への教育サポート (Instructional Support) の機能を担う体制の整備を願っています。

昨秋、道内の50以上の大学等が参加する「北海道地区 FD・SD 推進協議会」が設立されました。FD や教育改善は一大学限りの取り組みと思われがちですが、大学院生や (任期付きの) 若手教員の流動性が高まっているなかで、FD や人材育成の課題は一大学の枠を越えて広がります。北大の大学院生が、近隣の大学で TA として授業改善に貢献している例も聞きます。FD を通じた大学間連携の推進も今後の重要な課題です。

8年間の仕事で、全学の多くの教職員のみなさまにたいへんお世話になりました。この場をお借りして、篤くお礼を申し上げます。他大学等に招かれて北大の取り組みについて話す機会に、北大はどうしてこんなに先進的な取り組みを精力的に進めることができるのか、学内の抵抗はないのかと聞かれることがよくあります。全学教育の運営や教育改善の取り組みでは、さまざまな意見・利害の対立が生じることがありますが、多くのみなさまのお力で、一定の成果を上げることができたと感謝しています。対立が先鋭になり、立ち往生の場面もありましたが、私には見えないところで調整が進み、道が拓け、合意が形成されてきました。ある人はこれを北大の「教育インフラ」と表現しました。こうしたよき伝統を活かして、北大の教育研究活動がますます発展しますよう、心から祈っています。



学生同士のピア・サポート

国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻 博士後期課程
(ピア・サポーター代表) 岡本 健

ピア・サポート室開室の背景と目的

2009年11月から、ピア・サポート室が開室しました。ピア・サポート室は学生による、学生のための相談室です。大学に入学し、卒業していくまでには、学生生活上や研究上の悩み、就職や進路の悩みなど、さまざまな問題に直面します。周囲に相談できる相手がいる場合は、こうした悩みは乗り越えやすくなりますが、そうした相手が周りにいない場合、悩みが深刻化する可能性もあります。

ピア・サポート室は、そのような学生を含めてさまざまな学生に対して、同じ立場にある学生が相談にのる場所です。ピア・サポーターは、カウンセリングや高等教育の専門家から傾聴技法や学内の制度について研修を受けており、開室時間中はいつも2人以上が在室しています。

北大には、保健管理センターや、学生相談室など、学生が悩みを相談できる場所はすでにあります。ただ、一部の学生にとっては、それらは敷居が高いものになっているようです。保健管理センターや学生相談室に行くほど大げさなことではない、そう考えているのかもしれませんが。そのような学生にも援助

の機会を設けるため、学生が相談員となって学生を支援するピア・サポート室が立ち上がりました。

ピア・サポーターは、傾聴技法などについてトレーニングを受けていますが、その場で相談者の悩みを解決するような専門的な知識や技能は持ち合わせていません。ピア・サポーターは相談者の悩みを明確化させ、悩みが解決できる場所や、悩みの解決に役立つシステムを紹介するなど、いわゆるインテーカーの役割を果たします。学内にはすでに、さまざまな形で学生の生活をサポートしてくれる場所や人、組織があります。ピア・サポーターは、それらと悩みを持った学生をつなぐ役割を果たします。学生同士、気軽に話ができる場所を提供し、悩みの原因を相談者とともに掘り下げ、最適な解決をもたらしてくれる場所を紹介します。

学生同士のコミュニケーションを支援する～イベント『略して「本活」』～

2010年3月現在、ピア・サポート室では、『略して「本活」』と呼ばれるイベントを実施しています。これは「いらなくなった本を必要とする人に渡して

本の再活用を促進する会」の意味です。学生が使わなくなった本をピア・サポート室で引き取り、必要な学生に受け渡すことで、本の再活用を促進するとともに、それをきっかけに学生同士の交流を促進しようという取り組みです。

大学生・大学院生は在学中にさまざまな本を購入します。大学の授業で教科書として指定された文献はもちろん、それに関連する書籍、普段の学生生活で興味を持って読む書籍など、さまざまです。それらの本は、学生の卒業とともにどうなってしまうのでしょうか。後輩に譲る場合もあるでしょうが、学部によって、研究分野によっては、先輩・後輩の関係がそれほど密接でない場合も多く見られます。不要になった本は、古書店に売却されるか、廃棄されているのが現状です。これは大変残念なことです。

そこで、ピア・サポート室では、「もう必要ないけれども、誰か読む人があれば譲りたい」という学生と、「とにかく読書をして刺激を受けたい」「研究ってどういうものだろう、何か関連する本を読んでみたい」という学生をつなぐイベントとして、「本活」を企画しました。

具体的には、まず、不要になった本をピア・サポート室で引き取り、本の値段や冊数などに応じて文房具などと交換します。集まった本は、新入生の入学時(2010年4月)に、学生に無料で頒布する予定です。特に新入生は、大学というこれまでとは異なる場に入って来て、不安と期待の入り混じった気持ちでいると思われます。その新入生のために、多種多様な本と出会う機会を用意し、視野狭窄になるこ

とを避け、興味・関心を広く持って大学生生活をスタートしてもらおうお手伝いができればと考えています。

本イベントの狙いには、ピア・サポーターの実地訓練と、ピア・サポート室の広報という意味もあります。さまざまな学生の悩み相談に乗るピア・サポーターには、相手の話をじっくりと聴く能力をはじめ、高度なコミュニケーション能力が求められます。初めて会う相手と、どのように関係を構築していくのかが大きな課題となります。今回のイベントでは、書棚にピア・サポーターが常駐して、さまざまな相手と本をメディアにして対話します。また、本の頒布の際にピア・サポート室の案内も同時に配布して、ピア・サポート室自体の広報も行います。

「つながり」の創造を目標に ～ピア・サポート室の今後～

まだ開室したばかりのピア・サポート室ですが、今後、学生主体であることの良さを活かして、さまざまな「つながり」を創造する組織を目指して活動していきたいと考えています。学内にあるさまざまな組織と連携して、学生目線にたって、北大の学生が充実した学生生活を送れるようサポートします。皆様、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしく願い申し上げます。

【場所】 高等教育機能開発総合センター 1階 N棟
N109

【開室曜日・時間】 火、木・14:00～18:00



写真2 ドア看板

学習サポートのお知らせ

アカデミック・サポート推進室では、平成22年1月18日(月)から2月19日(金)の期間、学生への学習支援活動の一環として、「学習サポート」を実施しました。学習サポートは、全学教育科目の履修者を対象に、語学や理系基礎科目について大学院生TAが個別に学習指導を行うものです。用意した教室にTAが待機し、利用者が自由に訪れ、質問・相談をするという形で行いました。利用後には学生からアンケートを回収します。

5名のTAを採用し、語学(英語・中国語)、数学(線形代数・微分積分)、統計、物理、化学、生物に対応しました。それぞれの担当時間を示したポスターとチラシを高機能センター周辺で掲示・配布し、推進室のWEBページ、CALL教材、ELMSなどの電子媒体でもアナウンスしました。

準備や宣伝に費やせる労力と時間が限られており、実施期間も短かったのですが、予想以上の利用がありました。実施期間全体の利用者数・時間等の詳細は下表の通りです。2月8日までの授業期間中に絞れば、利用頻度は2.6人/日でした。これは、年30週150日開催した場合、年間390人の利用に相当します。利用が多かったのは数学と英語でしたが、全ての実施科目の利用がありました。

総利用件数	40件
総利用人数	46人
総利用時間	25.3時間
平均利用時間	38分/件

相談内容としては、一般的な疑問の解決、試験対策、レポート指導等が多かったのですが、留学の相談に来た学生もいました。学習サポートを複数回利用した学生もおり、中には、異なった科目の利用も見られました。学生には好評で、利用者アンケートでは役に立ったという声が多数寄せられました。

今回は試験稼働でしたが、TAからの報告書では、運営形態・方法について建設的な意見が出ました。

学習サポートは4月から再開します。学生・TAの意見を踏まえて、対応教科を増やし開催期間も通年へと拡大します。教科には、ドイツ語、フランス語、アカデミック・ライティング(レポート指導)を追加し、数学の対応時間を増加する予定です。実施場所は、6月までは暫定的にN106・107で、それ以降は推進室(E211)内で行います。対応教科と時間割の詳細は後日ホームページと掲示等でお知らせします。

普段の自習や試験勉強の方法、レポートの書き方、授業で理解できない箇所等について、学生の主体的な学習の支援を行っていきますので、利用を勧めたいと思います。(岡嶋 裕剛)

アカデミック・サポート推進室について
 高等教育機能開発総合センター E316
 (→ E211, 6月以降)
 Web <http://asc.high.hokudai.ac.jp>
 Mail asc@high.hokudai.ac.jp
 Tel 011-706-7526

全学教育 GENERAL EDUCATION

全学教育委員会報告 (第 79 回)

平成 21 年 3 月 1 日(月)に第 79 回全学教育委員会(平成 21 年度第 4 回)が開催され、以下の議題について話し合いました。

議題

1. 北海道大学全学教育委員会科目責任者に関する要項の一部改正
2. 「秀」評価, GPA 制度, 自由設計科目制度及び履修登録単位数の上限設定の実施(Q&A)
3. 「獣医学共同教育課程」における一般教養教育
4. 授業公開・参観支援システムの導入
5. H23 年度以降の「文系基礎科目」
6. H22 年度全学教育科目の開講計画の変更
7. H22 年度全学教育に係る TA の採用

報告事項

1. H21 年度第 1 学期の自由設計科目の利用状況
2. 全学教育における単位の実質化に関するアンケート調査
3. 身体に障害のある出願者
4. H21 年度第 2 学期履修者数
5. H22 年度新入生オリエンテーション及びクラス担任会議
6. H21 年度全学教育委員会の検討事項(報告)
7. H22 年度第 1 学期の履修調整
8. H22 年度全学教育科目に係る既修得単位の認定
9. その他: 芸術科目に関する専門部会の構成

科目責任者に関する要項の一部改正

創成科学共同研究機構が創成研究機構に改組されるのに伴い、同機構から全学教育科目担当責任者は選出されなくなります。

GPA 制度・自由設計科目・上限設定に関する Q&A

上記の制度についての Q&A の改定が議論されました。総合入試に備えて、成績評価の極端な片寄りの点検基準が「GPA2.4±0.5」となります。授業

にあたって、一度お読みください。新入生向けの Q&A も配布されます。

「獣医学共同教育課程」における一般教養教育

本学と帯広畜産大学で「獣医学共同教育課程」を実施することになり、H24 年度開設を目途に、専門教育のみならず、一般教養教育を含んだ共同の教育課程を編成するため検討を進めることになりました。

授業公開・参観支援システムの導入

授業改善のヒントを得るため、全学教育科目の授業参観が可能になります。参観を希望する場合はこのシステムを通じて申し込みます。当面对象となるのは、エクセレント・ティーチャーズの担当科目、授業アンケートの評価がよかった科目、科目責任者が推薦する外国語・理系基礎科目、公開希望があった科目です。6 月、12 月の 2 週間程度を想定していますが、日程などの都合により参観を断ることもできることにしています。

H23 年度から「文系基礎科目」が変わります

H23 年度の総合入試導入に合わせて、「文系基礎科目」を見直すことになりました。文系各学部の専門科目とのつながりを強め、代表的な学問分野の入門的な講義を展開すること、後期にも開講して再履修も可能にすること、大人数クラスの解消を図ることにより、入試枠の区別なく文系学生が部局横断的に履修でき、「専門基礎」的でありかつ学部の枠をこえて必要な内容の授業が可能になります。

開講計画の変更

H22 年度の開講計画で、未定だった担当教員の決定 48 件、講義題目の変更 15 件、新規開講 16 件、開講取消 2 件、学期・曜日の変更 3 件などが認められました。非常勤講師は、H16 年度比で半減の計画が 21 年度に達成され、22 年度も維持されています。

全学教育 TA の採用

全学教育の TA 採用は、のべ 1,023 名、金額で約 4,300 万円になります。H21 年度に比べて約 330 万増になります。有効活用により教育効果が上がることが望めます。

自由設計科目の利用状況

自由設計科目は GPA・上限設定・厳格な成績評価を導入する一方、幅広い学習の意欲に応えることを目的に、選択・選択必修科目を「卒業要件に算入しない科目」として上限設定外で登録できる制度です。また、学生の申請により、「卒業要件科目」に登録枠の変更ができます。H21 年度第 1 学期における自由設計科目の利用者は 1,031 名、一般教育演習(フレッシュマンセミナー)151 名、社会の認識 123 名、科学・技術の世界 108 名などで、登録枠変更の申請件数は、一般教育演習(フレッシュマンセミナー)62 件、環境と人間 27 件、思索と言語 23 件、社会の認識 26 件でした。「秀」評価を得たにもかかわらず、登録変更していない学生も 3.2% います。この制度の利用(登録変更)によって GPA が全体で 0.03 上昇しました。

全学教育科目の単位の実質化アンケート調査

全学教育科目担当教員に行った H21 年度 1 学期の「単位の实質化に関するアンケート調査」の集計結果が報告されました(回答率は 63.1%)。1. 授業の実施回数, 2. 学生の出欠確認, 3. 予備学習, 4. 成績評価の基準について質問しました。アンケートの回答から、多くの教員がまじめに教育に取り組んでおり(授業回数 15 回: 66.6%, 休講 0 回: 66.2%), 教員は予習、復習に各 1 時間程度使うことを想定して授業を設計していることなどが分かりました。

新入生オリエンテーションとクラス担任連絡会

H22 年度の新入生オリエンテーション実施案が議論されました。クラス担任連絡会は 3 月 17 日と 9 月 28 日に実施されます。3 月 23 日にメンタルヘルス講演会が企画されています。クラス担任によるクラスアワー、オフィスアワーは充実してきています。必修科目を 3~4 回続けて欠席した学生、復学・留年した学生、GPA が 2 以下の学生への指導など

が行われています。

H21 年度全学教育委員会の検討事項(報告)

今年度の全学教育の充実・改善の状況が、以下のとおり報告されました。

(小野 寺彰 理学研究院教授・センター長補佐)

1. 中期目標・中期計画の実施状況
 - 1) H18 以降の新教育課程の実施状況の検証・中間評価(報告書の作成)
 - (1) 一般教育演習・総合科目
 - ・ H21 年度から一般教育演習(フレッシュマンセミナー)・総合科目の導入科目としての位置づけを確認するため、以下のとおり変更した。
 - ① 全学教育科目規程(別表)で、一般教育演習(フレッシュマンセミナー)及び総合科目を授業科目の先頭に置いた。
 - ② 「一般教育演習」の科目名を「一般教育演習(フレッシュマンセミナー)」と改めた。
 - ③ 総合科目の単位数を、2 単位から 1 単位に改めた。
 - (2) 主題別科目、共通科目
 - ・ 履修者数は、主題別科目で 1 学期の前年比 99.9% (6,871 人)、2 学期の前年比 118.9% (6,486 人)で、全体的に履修者が安定した。
 - ・ 情報学を含む共通科目の履修者数も、1 学期の前年比 94.1% (5,453 人)、2 学期の前年比 103.4% (3,041 人)と、安定している。
 - (3) 外国語科目・外国語演習
 - ・ H19 年度から導入されたスペイン語と韓国語の履修者は、引き続きスペイン語の希望者が多数のため履修調整を行った。
 - ・ H21 年度入学者の選択した外国語は、ドイツ語 981 名(前年比 98.4%)、フランス語 456 名(91.9%)、ロシア語 64 名(83.1%)、スペイン語 237 名(100.0%)、ただし第一希望は 305 名、中国語 666 名(98.4%)、韓国語 156 名(101.3%)となった。
 - ・ H21 年度 CALL オンライン授業(英語 II)の実施状況: TOEFL-ITP 試験では、成績下位層の減少が進み、上位層は減少したものの、平均点は引き続き上昇している。
 - ・ 英語 IV についても、英語 III と同様に、レベル別・内容別のクラスを学生の希望に沿って抽選により決定する方法を導入した。
 - ・ H20 年度から導入された初習外国語 II のドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語における CALL オンライン授業の実施状況報告がなされた。
 - (4) 基礎科目
 - ・ 文系基礎科目の履修者数は、前年比 97.2% (1,378 人)だった。
 - ・ 理系基礎科目の履修者数は、数学が 1 学期は前年比 92.5% (3,861 人)、2 学期は前年比 96.3% (3,016 人)、理科が 1 学期は前年比 98.3% (5,831 人)、2 学期は前年比 99.2% (5,437 人)だった。
 - ・ 自然科学実験の履修者数は、1 学期は前年比 98.9% (958 人)、2 学期は前年比 101.4% (1,137 人)だった。
 - 2) その他の検討事項
 - (1) 初習外国語の選択システムの見直し
 - ・ 初習外国語の選択の条件・方法の改善として、以下のよう
な検討を進めることが了承された。
 - ① 例えば、入学後に学生が選択希望科目を申請し、履修調整

- により履修科目及びクラスを決定する方式を採用すること。
- ②能力と意欲のある学生に、2つ目の初習外国語も十分な学習機会を確保するため、初習外国語4単位を選択科目として履修できるようにすること。
- (2) コアカリキュラムの検証
- ・総合博物館の教育 GP 関連科目として、一般教育演習(フレッシュマンセミナー)で「北大エコキャンパスの自然—植物学入門」及び「北大エコキャンパスの自然と歴史」の2コマを開講した。
- (3) 大学間連携
- ・キャンパス・コンソーシアム函館提供科目として、総合科目「人間と文化」で「市民がになう国際観光論」及び「アントレプレナー(起業家精神)育成」の2コマを集中講義の形で開講した。
- (4) 芸術科目の充実・支援
- ・情報教育館のスタジオ型多目的中講義室にグランドピアノを購入し、芸術科目で活用するとともに、授業に使用しないときは学生へも開放した。
2. 単位の実質化・授業改善について
- (1) 成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施
- ①成績評価基準の設定: ガイドラインの見直しを行った上で学内に公開した。
- ②成績評価の妥当性の検討
- ・極端な片寄りに関する問合せへの回答に対するコメントを作成した。
- ③学生からの成績評価に関する申立て制度
- ・H21年度から学生からの成績評価に関する申立て制度を導入し、1学期には3件の申立てがあったが、いずれも成績訂正の必要はないと判断された。
- (2) 「秀」評価及び GPA 制度・履修登録単位数の上限設定制度の検証・改善
- ・H21年度入学者から「自由設計科目制度」を導入し、併せて体育学A及び情報学IをGPAの対象外とする取扱い、学期加算単位数及び総合科目・一般教育演習の特別枠は廃止した。
- (3) 単位制度の実質化
- ・H21年度から総合科目の単位数を1単位に変更した。
- (4) 学期末試験を含めた授業期間(16週)の運用状況
- ・「全学教育科目に関する単位の実質化に関するアンケート調査」を実施し、休講・補講など授業期間16週の運用状況に関する調査を実施した。
- (5) 自習時間・GPA・履修単位数の調査・検証
- ・「授業アンケート」の「自習時間」に関する設問に対する集計結果を分析し、関連の委員会で検討した。90分の授業1回あたりの予習復習時間は、H20年度1学期の全学教育科目で平均1.01時間(専門科目1.08時間)となった。なお、自習時間の算出にあたって、より厳密となるように「30分以下」との回答について、これまで0.5時間と計算していたところを0.25時間に修正した。
- (6) 単位の実質化を進める授業改善・FDの充実
- ・クリッカーを複数セット(60個入り4セット、120個入り1セット)用意した。1学期16名、2学期7名の利用があり、全学教育科目、専門科目や大学院のゼミナールといった授業だけでなく、クラスオリエンテーション、オープン・キャンパスや公開講座の実施にも活用された。
 - ・「アカデミック・サポート推進室」が開設され、学生の基礎科目等(数学、統計学、物理、化学、生物、英語、中国語)の自習支援を目的とした「学習サポート」を開始した。
- (7) シラバスの改善(内容・項目の充実)
- ・シラバス入力時に必須項目が未入力の場合は、入力が終了

できないようにした。

- ・「シラバス・コンクール」として、参考例となるようなシラバスを選定し、ホームページに掲載して、シラバス入力の際に参照できるようにした。
 - ・英文シラバスの導入に向けて、シラバスの各項目に英文表記を併記することとした。
- (8) TA の活用、TA 研修の充実
- ・H21年度全学教育TA研修会(4月6日)は午前からの参加者215名、午後までの修了者192名で、対象者361名に対する修了率は53.2%だった。
 - ・H22年度の全学教育におけるTA採用予定は、のべ1,025(前年度857)人、34,208(前年度31,239)時間、経費は4,354(前年度3,971)万円となった。
- (9) 全学教育における授業公開制度
- ・H22年度から、「授業アンケート」結果によるエクセレント・ティーチャーズなどが担当する一部の全学教育科目について、「授業公開・参観支援システム」により授業参観が可能な制度を導入する。
3. 全学教育科目の充実について
- ・一般教育演習(フレッシュマンセミナー)では、履修希望者数が3名以下のため1学期には7科目、2学期には1科目が開講取消となった。
 - ・外国語演習でも、H21年度から、一部の科目を除いて、履修希望者が3名以下の授業の開講取消を実施し、1学期には23科目、2学期には14科目が開講取消となった。
4. 全学教育支援体制の強化について
- ・「全学協力」による開講数は、総合科目57(前年度61)科目、一般教育演習(フレッシュマンセミナー)は137(前年度142)(うち退職教員担当5(前年度4))科目であった。
 - ・外国語教育センター以外の部局からの外国語演習の開講数は、H19年度40科目、H20年度70科目、H21年度74日、H22年度は69日の予定となり、安定した科目数の提供が続いている。
5. 非常勤講師・特任教員について
- ・全学運用定員解消計画は、H21年度中に解消の予定であった理学部1名及び工学部2名分が解消され、外国語教育センターを除くすべての運用定員が解消された。
 - ・H22年度の非常勤講師採用については、H16年度比50%減を達成したH21年度の採用実績を維持する形で開講計画を作成した。
 - ・H22年度以降についても、従来どおりの枠組みで退職教員を採用可能とするよう承認事項・申合せの更新を行った。
6. 新教育課程の実施に伴う教務情報システム・教務事務体制に係る改善事項
- ・履修登録時及び成績確定後に学生がオンラインで「自由設計科目」の登録・解除が可能なシステムを整備した。
 - ・各学期途中における「履修取消」及び「成績確認」がオンラインで可能なシステムを整備した。「履修取消」については、授業担当教員が「履修者名簿」で取消者を確認可能になった。
 - ・H22年度から、TA研修と業務の実績を学生ごとに記録する「TAデータベース」の運用をはじめた。
 - ・「授業公開・参観支援システム」導入の準備を進めた。
 - ・教務情報システム上の「アンケート」システムを導入し、学生調査アンケートや、クラス担任アンケート調査を実施した。今後は教員に対するアンケート調査実施にも活用する。
7. 施設・設備の充実について
- ・液晶プロジェクターが設置されていない教室への設置を進め、古い液晶プロジェクターを更新した。

- ・自然科学実験のための顕微鏡等, 実験・実習用の装置を購入し, 施設・設備の充実を図った。
 - ・E棟教室の机と椅子を全面的に更新した。
 - ・体育館の改修工事が実現した。
8. 履修指導について
- ・H19年度から実施している, 上級生による履修相談会 MANAVI を引き続き実施し, 約 1,931 名(新生生の約 75.5%) が参加した。
 - ・クラス担任マニュアルに, 担任の役割として GPA を用いた修学指導を記載し, さらにクラス担任連絡会でも併せて指導を依頼した。
9. クラス担任制度の強化について
- ・H21年度から新たに「北海道大学基礎クラス担任制度に関する要項」を整備し, クラス担任の業務等について明確に示した。
 - ・オフィスアワー(個別指導)の設定を依頼し, 学生に掲示により周知した。
 - ・クラス担任マニュアル及びクラス担任連絡会において, クラスアワーを年 4 回行うよう依頼した。
 - ・第 2 回クラス担任連絡会を 9 月 28 日に開催し, 学生支援に関する講演やパネルディスカッションを取り入れた。
 - ・全学教育の授業を 3~4 回連続して欠席した学生について, 授業担当教員からクラス担任に連絡して指導を行う制度の実質化: 必修科目である外国語科目を担当する教員あてに依頼した結果, 1 学期は 64 名, 2 学期には 41 名について, 連続欠席の連絡があり, 所属学部の教務を通じて対応した。

- ・H21 年度から学修簿の連帯保証人への送付を開始し, H20 年度入学者 1 年次分を 5 月に発送した。
 - ・クラス担任(学生支援)マニュアルを, H22 年度版から冊子として刊行した。
10. 高大連携授業の今後の在り方について
- ・高校生による全学教育科目の授業聴講は, H21 年度から「北海道大学高大連携授業聴講型公開講座」として本格実施となり, 3 校(札幌旭丘, 札幌北, 藤女子)と協定を結び, 2 学期に計 18 名の高校生が 15 科目を受講した。
11. 各種アンケート調査結果の活用について
- ・授業アンケートによる自習時間(H19 年度 2 学期及び H20 年度 1 学期)のデータが報告された。
 - ・アンケートシステムを活用して, 戦略的の大学連携事業による 4 大学学生調査アンケートを実施した。
12. H19 年度以降の GPA・上限設定・成績評価, カリキュラム, FD 等の改善策について(最終報告)(H19.3)に基づく充実・改善について
- ・情報基盤センターで作成した, ELMS を利用した履修者の連絡先などのデータの入手方法等についてのマニュアルを, 全学教育科目の担当教員に周知した。
 - ・アカデミック・サポート推進室を設置し, 学習サポートなど学生への個別指導を始めた。
13. 学生編成・学生募集単位の改定関連事項
- ・H23 年度の総合入試制度の導入に向けて, 教育改革室各 WG において検討を進めた。

*** 全学教育の科目責任者・クラス担任からひとこと ***

医学部 21 組・クラス担任 医学研究科 教授 有川 二郎

医学部医学科は一学年の定員が 100 名で, 21 組と 22 組にクラス分けされています。平成 21 年度入学生についてクラス担任をするようにとの連絡があったとき, 「えっ, 大学にもクラスの担任がいるの?」というのが私の正直な驚き, 感想でした。それくらいの, 申し訳ないのですが, 認識しかありませんでした。そして, 「大学生はもう大人なのだから, 何もクラス担任なんて必要ないんじゃないの, なんて考えていました。

しかし, 学生調書でクラス全員の顔写真と履歴を見ていくうち, 「ああやっぱりまだ子供だな」と妙に感心するようになりました。その子供たちが一生懸命に勉強して, 北大に入学してくれた訳です。ここはしっかり勉強をして無事に卒業して行って欲しいと考えるようになりました。そのために, 何かの

時には担任を思い出してもらって相談してもらえればと思っています。

しかし, 実際にクラスアワーに来てくれる学生は基本的に問題ないわけで, また, 学生も年齢的には大人ですので, いろいろ限界もあります。一方, 自分の学生時代を思い出し, きっと, 危ういことをいろいろな時にしている学生がいるのだろうと容易に想像できます。担任としての活動の意味や限界を感じる時もありますが, 全員が, 「いっばしの」北大生として成長し, 卒業して行って欲しいと思っています。

クラス担任になって

工学部 31・クラス担任 情報科学研究科 准教授 有田 正志

大学教員の多くが授業、大学院生を含む高学年生の指導、自身の研究および種々の雑務で忙しくしている昨今です。これらの業務とのバランスを上手くとりながら、自身に無理なくしかも新入生の助けになるために、何ができるのでしょうか。

「担任として何をすればよいのかわからない。しかも、事前の担任連絡会では個々の授業の受講方法などを入学ガイダンスで説明するよう求められる。真面目に考えるほどパニック状態になる。」これが偽らざる当初の状況でした。従って開き直りを決めました。「指導により学生を変えることなど出来ない」「自分で解決困難な事項については事務職員や専門教員の助けを借りればよい」。できる事を無理の無い範囲で、気楽にやればよいと考えることにしました。

入学ガイダンス時には、学生から担任へ連絡先(電話、メール)をメールにて知らせるように指示しました。連絡のあった学生には全員に簡単なコメントをつけて返信しました。例えば「○○○君、有田です。メールを受け取りました。こちらこそよろしく」。下宿生には「多少は下宿生活に慣れてきましたか?」などとも付記しました。再度返信を送ってくる学生もおり、特に遠方から来ている学生には多少の役にたったかもしれません。すんなりと全員の情報が集まったわけではありませんが、5月には全員の情報が集まりました。これはその後の学生への連絡には重宝しました。なお、全員への連絡時には、bccでの送付を行い、個人情報については気を使いました。主には携帯メールなので短文で、またファイル添付は行っていません。良好なレスポンスが得られました。ただ学生とはある程度の距離を保つように心がけました。教員は友達ではないのです。

クラスアワーについては、情エレ4クラス合同の安全講習以外に、1年後期にクラス独自の安全講習と進路指導講演を行いました。学生の顔を見るのが目的です。クラス安全講習については手持ちの高学年用教材を用い、また進路指導については前年度就職担当教員の協力を得ました。手持ちの教材を使っ

ただけなので、さしたる負担はありませんでした。

成績不良者に対する修学指導を求められていますが、私の場合成績によらずすべての学生と面談を行いました(1年後期、2年前期)。成績中間層の学生も含めて、個々の学生と話せる機会を持ちたかったからです。学生の話す態度や表情を見て、充実した生活を過ごしているかどうかの確認をすることが目的です。私の空いた時間帯を示して、学生に予約を入れてもらいました(1人10分)。多くの場合には、とりとめもない世間話をただけです。下宿生活について、クラブについて、学業について、アルバイトについて等々。必ずしも強い指導をしようとは考えませんでした。必要に応じて進級のルールについての説明もしましたが、必ず教務係で確認するように指導しました。全員が来訪したわけではありませんが、これにはかなり時間を使いました。ただ学生の話聞くことは嫌いではないので、負担だとは感じませんでした。その他に、学生からの要求に応じてまたはこちらから呼び出して、主に学業および進路についての相談も数度行いました。この場合も、必要に応じて私の意見を述べますが、主には学生の話聞くことに終始しました。十分に話を聞いてあげること、これが最も大事だと考えるからです。

私が担任として行ったことはこれだけです。「担任がここにいて、必要に応じてすぐ連絡が取れ、たよりなさそうではあるがとにかく話を聞いてくれる。」このような駆け込み寺にも似た安心感をもってもらえたとすれば、それで十分でしょう。具体的方策については千差万別、各担任のやりやすい方法で、気楽に実践すればよいのではないのでしょうか。上述のことが最善の方法であったのか、有効であったのかはわかりませんが、私と同様に素人担任である先生方への一助になれば幸いです。

生活と化学（入門化学）を担当して

「化学」企画責任者 理学研究院 教授 谷野 圭持

“物質社会”が内包する諸問題が鋭く指摘されるこの頃ですが、私達の日常生活は様々な機能を示す物質に囲まれて成立しています。衣・食・住のすべてに深く関わり、衛生的かつ快適な生活を根幹から支えているのが化学です。化学に関する最小限の知識を欠いては、賢明な生活者（消費者）であることも、資源や環境に関する社会問題を理解することも覚束ないと言えましょう。

昨年度から筆者が担当している「生活と化学（入門化学）」は、日常生活に密着した題材を取り上げ、その必要性や問題点を化学の視点から理解することを目指しています。入門科目ですので、文系学部の学生にも直観的にとらえられる平易な解説を心掛けています。その主眼点は、（１）すべての物質は、目に見えない微小な粒でできていること、（２）それ以上細かくすると、元の性質を失ってしまう粒の単位（分子）があること、（３）分子には、各々に固有の物質名があること、（４）物質が示す性質は、

分子の形とその集合の様式で決まること、になります。

「エタノール」が物質名であることは高校の化学で学びますが、「クルクミン」や「プロポリス」が何であるかは習いません。そこで例えば、日用品のラベルに表記されたカタカナ語を調べてレポートにまとめ、それらが謎の呪文ではなく分子の名前であることを学習し、プラスチックの模型を組み立てて分子の形を確かめたりしています。

初年度には、専門用語を極力使わずに感覚に訴える授業を目指す過程で、いろいろな発見がありました。授業アンケートの感想や意見も取り入れ、2年目の充実を図りたいと思います。

はがねのつるぎをつかった…

「歴史の視座」「社会の認識」企画責任者 法学研究科 准教授 得津 晶

「しかしなにもおこらなかつた！」

ドラゴンクエストという国民的人気ゲームがある。このゲームではモンスターとのバトルでプレイヤーは必ず何かをしなくてはならず、何もしないことは許されない。「ぼうぎょ」というコマンドもあるが、これは敵の攻撃から受けるダメージを減らすことになり、厳密には何もしないのと違う。そこで、真に何もしたくない場合は、装備している武器や防具（はじゃのつるぎ等の特殊な装備を除く）をどうぐとして使うのだ。

もちろんゲームと現実とは違う。ドラクエでは、最終目的（クリア）のためにはバトルに「勝つ」こ

とが常に望ましく、そのためには常に何らかのコマンドをすべきといえる。だが、現実には、墮天使撃破といった誰もが同意する単一のクリアは存在しない。だからバトルに勝つこと、毎回コマンド入力することが常に良いこととは限らない。大学教育も現実世界のはずである。ところが、大学の外からの声は、単位制度改革だ、新入試制度導入だ、とドラクエ的に常に何かすることを求めてくる。どうも大学はドラクエに近いらしい。それならば、今までの諸改革がはがねのつるぎだったのかはじゃのつるぎだったのかはともかく、ダーマの神殿に行って「賢者」に転職したいものである。

2010 (平成 22) 年度 全学教育部行事予定表

	【日(曜日)】	【行事】
4月	2(金)～7(水)	新入生定期健康診断
	7(水)	新入生オリエンテーション及び学部ガイダンス
	8(木)	入学式
	9(金)	学部ガイダンス
	12(月)	第1学期授業開始日
	12(月)～16(金)	抽選科目の申込期間 (Web 入力)
	20(火)	抽選科目の結果発表日及び追加申込日
	21(水)～27(火)	平成 18～22 年度入学者履修届 Web 入力
6月	21(水), 22(木)	平成 17 年度以前入学者履修届受付
	3(木)	開学記念行事日 (休講)
	3(木)～6(日)	大学祭 [3(木), 4(金) は休講]
8月	9(水)～11(金)	履修登録した科目の取消し受付
	1(日), 2(月)	オープンキャンパス [2(月) は通常通り授業を行う]
	3(火)	初習外国語統一試験日 (通常授業は休講)
	4(水)	水曜日の授業終了日
	6(金)	金曜日の授業終了日
	9(月)	月曜日の授業終了日
	10(火)	火曜日の授業終了日
	11(水)	授業を行わない日
	12(木)	木曜日の授業終了日 (第1学期授業終了日)
	13(金)～9月30日(木)	夏季休業日
	16(月)	成績報告締切 (非常勤 [帳票])
	20(金) 正午	成績報告締切 (常勤 [Web 入力])
	27(金)	平成 18～22 年度入学の1年次学修簿 Web 上公開
	27(金)～9月2日(木)	1年次成績確認期間
	9月	上旬～中旬
10月	1(金)	第2学期授業開始日
	1(金)～7(木)	抽選科目の申込期間
	12(火)	抽選科目の結果発表日及び追加申込日
	13(水)～19(火)	平成 18～22 年度入学者履修届 Web 入力
	13(水)～14(木)	平成 17 年度以前入学者履修届受付
11月	21(日) (予定)	AO入試・帰国子女入試
12月	8(水)～10(金)	履修登録した科目の取消し受付
	27(月)～1月4日(火)	冬季休業日
1月	5(水)	授業再開
	14(金)	センター試験準備 (休講)
	15(土)～16(日)	大学入試センター試験
	28(金)	金曜日の授業終了日
2月	2(水)	水曜日の授業終了日
	3(木)	木曜日の授業終了日
	4(金)	初習外国語統一試験日 (通常授業は休講)
	8(火)	火曜日の授業終了日
	9(水)	月曜日の授業を行う日 (月曜日の授業及び第2学期授業終了日)
	14(月)	成績報告締切 (非常勤 [帳票])
	17(木) 正午	成績報告締切 (常勤 [Web 入力])
	25(金)	北海道大学第2次入学試験 (前期日程)
	28(月)	平成 18～22 年度入学の1年次学修簿 Web 上公開
	28(月)～3月4日(金)	1年次成績確認期間
3月	12(土)	北海道大学第2次入学試験 (後期日程)
	中旬～下旬	学科分属手続: 当該学部

注) 平成 20 年度から, 補講期間, 定期試験期間及び追試験期間が廃止されました。

アイヌ語・アイヌ文化の授業に思うこと

アイヌ民族博物館 学芸員 北原 次郎太

2009年度から「アイヌ語を通して文化を学ぶ」(思索と言語)という授業を担当しています。「サッポロ」という地名や、生魚を凍らせてから食べる「ルイベ」など、先住民族アイヌの言葉や文化は北海道の暮らしに溶け込んだものですが、日常の中でそれが意識されることはあまり多くないようです。道内出身の学生でも、アイヌ民族が現代社会に暮らしていることさえ知らないことが珍しくありません。

この授業では、アイヌ民族の歴史と現状、言語や生活文化、精神文化の多様な側面を、映像資

料や音声資料、実物資料によってわかりやすく解説し、日本が多文化社会であることや、アイヌ民族を知ることを通じ、自らを知ることの大切さを伝えたいと思っています。アイヌ民族の例に限らず、こうした「伝統的文化」は、グローバル化が進む今日にあってなお、価値を持ち続けています。なかでも言語と宗教がよく取り上げられますが、これらは当該社会においては自明のもので、異なる民族の目にはしばしば奇異に映り、摩擦や誤解の原因となりがちです。国際的な協調に寄与するためには、足下の共生から実現していくことが大切ですし、そのためには自らを知り他者を受け入れることが不可欠です。この授業で、そうした経験を積んでいただきたいと思います。

高等教育 HIGHER EDUCATION

UC バークリーでの GSI 制度

はじめに

北大 理学部 物理学科では、2010年4月から、TAによる新しい体制の授業が導入されます。これは、今までは教員によって行われてきた物理学演習の授業を、その準備や実施、学生の成績評価まで含めて、すべて大学院生のTAが代わりに行うというものです。このようなシステムは、現在アメリカのほとんどすべての大規模公立大学で取り入れられています。中でも、カリフォルニア大学バークリー校(UCB)は、いち早く全学的な体制の整備を進め、非常に効果的にこの体制を機能させていることで有名です。TAというと、授業を行う教員の補助をするという広い意味があるため、UCBでは、授業そのものを行なうTAを通常のTAと区別してGSI(Graduate Student Instructor: 大学院生講師)と呼んでいます。今回は2月16日～22日までUCBを訪問し、GSIによる実際の授業の参観と、関係す

る担当者へのインタビューをしてきましたので、その内容を報告します。

UCBでのGSI制度

UCBにおけるGSI制度については、このセンターニュースや高等教育ジャーナルなどでも何度か紹介されていますので、ここでは簡単に制度の概要をご紹介します。

UCBのほとんどの科目の授業は、講義と実習がセットで構成されています。講義は教員が担当し、多くは週に2～3回行われ、一度に数百人、科目によっては千人を超える学生が受講します。この受講学生を、15～30人程度ずつのクラスに分け、各クラス単位で実習が行われます。この実習の授業を担当するのがGSIです。通常は各クラスに1名ずつのGSIが割り当てられ、GSIは担当する授業の実施、準備や学生への成績評価などの一切を行い

ます。この授業に教員が立ち会うことは、基本的にはありません。

ここで実習授業とは、講義で扱われた概念や現象を、学生自らが実際の実験・観測を通して予想、確認、考察を行う実験授業 (Laboratory Class) と、講義の理解を深めるための例題や問題の演習を、学生同士の議論を通して行うディスカッション授業 (Discussion Class) などで、教員による講義の進行に合わせてその内容を補完するよう設計されています。授業内容は教員か、ヘッド GSI と呼ばれる科目ごとの GSI のリーダーによって作成されるシラバスに基づいていますが、個々の細かな授業の方法については、各 GSI の裁量に任せられています。

ほとんどの場合、GSI の勤務時間は週に 20 時間です。典型的には、この内の 4 時間が実際の授業、2 時間がオフィスアワー、残りが授業の準備やミーティング、レポートの採点や成績評価などに充てられます。給与の月額額は、経験などにもよりますがおよそ \$1,600 ぐらいで、さらに GSI は学費の多くを免除されるため、経済的な条件はかなり良いのではないかと思います。

GSI 制度を支援する仕組み

GSI には誰でもなれるというわけではなく、GPA で 3.0 以上であることなど、ある程度の条件が必要です。それでも、講義そのものではないとはいえ、授業の構成や成績評価まで教員ではなく大学院生の GSI が行う、ということに驚かれる方もいらっしゃるかもしれません。もちろん、完全に GSI が授業の責任を負うというわけではありません。授業内容については、毎週一度、講義を行う教員 (スーパーバイザー) と、その講義に属するクラスの GSI 全員が 1 時間程度のミーティングを持ち、その週の講義内容や特に重要な箇所などに合わせて、スーパーバイザーから GSI へ指示やアドバイスが出されたり、GSI からそれぞれの授業の進行状況などが報告されます。科目にもよりますが、演習問題や実験課題がまとめられたワークブックなどが過去の GSI 授業の蓄積として既に作られていたり、教員がプリントとして作成している場合が多く、GSI はその中から問題や実験内容を選ぶことで、各回の授業内容を構成できます。また、成績評価についても、GSI による評価は最終的にはスーパーバイザーからの署

名承認を得る必要があります。万一授業中の事故などが起きた場合には、スーパーバイザーや授業を開講する学科長がその責任を負うことになります。

しかし、こうした運用上の仕組み以上に重要なのは、やはり GSI のトレーニングです。その支援を全学的に行っているのが、GSI Teaching and Resource Center (以下 GSI センターと略す) です。その活動の一部を挙げると、(1) GSI 向けと教員向けの研修会やワークショップの主催、(2) 教育や教授法に関する GSI 向け必修授業やオンラインコースの開講、(3) GSI への個別のコンサルティング、(4) GSI への表彰制度、授業助成金制度の運営、などがあり、GSI が授業を行う際に必要となる、さまざまな知識や技術を身につけるための支援を行っています。なお、各学科でも、学科や科目に特化した GSI 向けの必修授業を開講しています。

GSI 制度の開始当初は、一部の学生やその親から、大学院生が授業を担当することへの不満なども聞かれたそうですが、GSI センターの設立とその後の体制の整備の結果、現在この制度は全学的に非常に成功しており、学生からの評価も高いそうです。特に全学教育過程においては、その根幹の一翼を担っているともいえるほど、GSI 制度は UCB のカリキュラムの中に深く組み込まれています。

実際の授業の様子

今回の訪問では、GSI センター長のリンダ・フォン・ヘーネ博士に手配していただき、物理学、化学、生物学、心理学、人類学の GSI による実験授業とディスカッション授業を参観させていただきました。こうした授業は、主に 3～5 名程度の学生によるグループワークとして行われ、GSI の仕事は、実験授業ではつねに教室内を巡回して学生からの質問に答えたり、実験方法や内容に関してアドバイスをすることなどが中心です。また、演習形式のディスカッション授業では、グループごとに演習の解答を発表させて解説を加えたり、学生のディスカッションへの助言などを行っていました。GSI によっては、授業の始めに講義の簡単な復習や、独自に準備した内容での補足を行うなど、やはりそれぞれの GSI ごとに工夫して授業が進められていました。

どの授業でも、学生が非常に積極的に授業に参加しており、GSI への質問や、他の学生との議論・

相談などが活発に行なわれていることが印象的でした。また、どの GSI も、学生からの質問への応答や、課題や助言の与え方が大変見事で、学生からの信頼も厚いように見受けられました。

まとめ

今回訪問した UCB 物理学科のボブ・ジェイコブセン教授によると、GSI 制度のメリットとして、(1) 教員の授業への負担を減らす一方で、学生にはきめ細かな授業を提供できる；(2) 大学院生への実際的な経済的支援となる；(3) 院生に教育経験を与えられる。これは PFF (Preparing Future Faculty) の観点からも非常に効果的である；(4) 院生が学生に対応することで、教員と学生の間にある考え方の

ギャップを埋め教育効果を高めることができる、の4つが主に挙げられるとのこと。これは、学生、院生、教員、大学、いずれにとってもメリットのある、大変良い仕組みだと思います。現在日本で一般的な TA 制度でも、この一部は達成できるかもしれませんが、特に (2) や (3) については、GSI 制度に学ぶことは多いのではないのでしょうか。

もし北大でもこの制度の全学的な導入に向けて取り組むとしたら、その際は UCB の GSI センターのように、体制の整備と運用を全学的に支える機関を同時に設立することが必須のように思います。まずは、今回学んできたことを4月からの物理学科での制度実施に生かせられればと思っています。

(西森 敏之, 齊藤 準, 竹山 幸作)



写真1 GSIセンターのある Sprout Hall

インディアナ大学における学習・教育支援

2010年2月22～23日にかけてアメリカ・インディアナ大学 (IU) の視察に訪れました。IUは8つのキャンパスからなる、全米一の規模をもつ州立大学です。今回は、その中心的な存在であるブルーミントン校へ赴きました。

ブルーミントン校は学生数4万人超、4～6年以内の卒業率が70%以上という、高い卒業率を誇る大学です。米国の一般的な大学の卒業率は50%を

下回りますので、高度な教育が行われていると言えます。この理由として、優秀な学生を積極的に受け入れることや、ほとんどの学生がキャンパス内に居住していること、学習サポートの充実、学生へのフォローアップなどが挙げられるそうです。

IUは、NSSE: National Survey of Student Engagement (ネッシー) という教育評価のための全米学生調査の運営でも知られています。ネッシー

は州政府や評価機関への報告に向けた大学での学習の品質管理・質保証のためのアンケート調査で、他大学のデータも有料（実費負担）で集めて分析し、各大学にデータをフィードバックしています。

教育システムの在り方も日本とは大きく異なり、例えば、試験の採点から成績の評価までのデータが、全てオンライン上で一括管理されており、経済的で柔軟性に富み、時間の短縮にもつながるそうです。入学生に対しては、数学・語学のクラス決定のためのプレースメント試験を課し、学生のスキルに見合ったクラス分けがされます。成績優秀者は初級クラスをスキップでき、水準に達していない学生はコミュニティカレッジのクラスを勧められます。

試験問題は自作のものもありますが、他大学や企業から購入するケースが多いそうで、語学系の試験問題は教員ではなく大学スタッフが作成することもあるそうです。

今回話を伺った6名のスタッフの方も、それぞれが学校での教育経験をもつプロで、分野はさまざまですが、修士号・博士号の取得者で、5年以上の教育経験と修士号が必須となるインディアナ州の

teaching license を取得しています。

私たちアカデミック・サポート推進室では、今春より学習サポートを本格的に開始することから、IUにおける学習支援の様子を視察しました。IUで行われている学習サポートは数学とレポート指導（文章作成）の二つです。今年1月に私たちが試行した学習サポートでは数学とレポート指導に対する要望が多く寄せられ、新たにレポート指導を導入することにしました。そこで、IUのレポート作成指導を行っているWTS(Writing Tutorial Services)を調査しました。

WTSでは大学院生を中心としたチューターによる個別指導が行われています。利用者は年間5,000人、指導時間は年間8,000時間に及びます。WTSの職員スタッフは2名で、40名のチューターを中心に運営されています。指導を行う部屋は学内各所に複数あり、学生の利便性を考えて学生寮にも設置されています。WTSでは文章作成の要点や、実例を取り上げた小冊子も用意されており、実例を挙げたものでは、本のレビューの書き方、大学院への入学希望の書き方などの実際に必要となる文章が取り上げられているのが印象的でした。

IUの運営費は、州政府からの支援は23%だけで、残りは外部研究費や卒業生の寄付でまかなわれています。卒業生が社会的に成功を収め大学へ寄付をしてくれないと経営が成り立たないそうです。そのため、熱心な教育が行われ、学ぶことと教えることに対する支援体制が充実しています。WTSはその学習支援の一環で、利用者の75～80%は成績優



写真1 インディアナ大学ブルーミントン校



写真2 WTS小冊子

秀者だそうです。これは、レポートなどの課題の提出前に WTS を利用することによりレポートの質が向上するからだそうです。

教えることに対する支援も充実しており、チューターになった学生は学費が免除され、質素な生活なら賄える程度の給与が得られます。チューターとして働いたことが単位と認められる場合もあります。アメリカの大学院では学生に Learning and Teaching の能力が求められており、学ぶだけではなく教えることができ一人前とみなされます。そのため、チューターになることは、大学院生自身の評価の向上に直結するとのことでした。教えることに価値を与えることで優秀なチューターが集まり、学習支援体制が充実してゆく良い仕組みができていると感じました。

教えることへの支援はチューターだけではなく、教員向けにも行われており、シラバス作成、教材作成、テスト作成、コンピューター利用等を支援する

部署が複数設けられています。教員向けの教育ワークショップが毎週開催され、大教室で講義をする教員へのセミナーも行われます。セミナーでは、優れた能力をもつ教員が他の教員の前で講義を行い、参加者はそのスキルを学びます。このセミナーの講師役には 1 回 2,000 ドルもの報奨金が支払われます。Scholarship of Teaching & Learning という教育改善に関する奨励金もあり、教育の質向上に対する支援体制が充実していました。

質の高い教育を行うことで卒業生が社会的成功を収め、成功するための教育を受けた大学へ寄付をする、大学は卒業生の社会的成功を目標として教育の質を高めるための努力を継続する。この教育と寄付のサイクルが確立した大学は教育の質を保ち続けることができるのだと感じました。

(柴田 洋, 岡崎 裕剛, 日吉 大輔)

シンガポール国立大学訪問記

ここ数年、本学では国際化に向けた取り組みが進められています。また、単位の実質化により、いかに学生の自主的な学習を促す環境を作るかなど、課題はたくさんあります。一方、アジアでは、このよう課題をうまくこなしている大学がいくつもあります。今回はその中の 1 つ、シンガポール国立大学を訪問しました。シンガポール国立大学は、約 100 ヶ国から 30,000 人以上の学生が集まる国際色豊かなアジアを代表する大学です。

われわれは、人文社会科学部中国学科、Centre for English Language Communication(CELC)、Centre for Instructional Technology(CIT) の 3 つの部署を訪れました。

人文社会科学部中国学科

まず最初に、人文社会科学部中国学科を訪問しました。学科主任の WONG SIN KIONG 准教授、YUNG SAI SHING 准教授が出迎えてくれ、ZHEN XU 准教授、XU LANJUN 准教授も加わりお話を伺うことができました。

この学科では、中国語研究だけでなく、中国文学、中国史、中国哲学、中国語 - 英語翻訳と、中国に関する分野を幅広く研究しており、26 名の教員、1,000 名を超える学生が在籍しています。ここでは授業の 80% は中国語、20% は英語で行われています。実際、今回対応してくれた先生たちは、インディアナ大学やプリンストン大学など米国の大学で博士号や修士号を修得しており、英語がとても堪能でした。

また、研究面だけではなく教育に関しても力を注いでいます。XU 准教授は着任時に、先生たちの授業がとても工夫されており、学生の興味を引くパワーポイントが作成されていることに驚いたそうです。実際、LANJUN 准教授は中国の映画を題材とした中国文学の授業を行って、人気が高いそうです。そんな彼らは、シンガポール大学に着任したときには、3 日間の新任教員研修を受けたといいます。

中国学科の方たちはとてもフレンドリーで、昼食を共にし、さらに交流を深めました。

CELC

次に、CELCを訪問しました。このセンターは、学生に授業、研究、そして将来の仕事で必要になる、英語力とコミュニケーション能力を効果的に身につけてもらうための活動をしています。37名の常勤スタッフを抱える大きなセンターです。ここでは、プロフェッショナルディベロップメント担当主任のVaraprasad Chitra氏が対応してくれました。

まず、CELCの概要のビデオと、スライドでセンターの活動を説明してくれました。このセンターのメインの仕事の1つは、学部生が全員受けなければならない英語力テスト Qualifying English Test(QET)を企画・実行することです。このテストにより、基礎英語クラスを履修する必要があるかなど、多様な学生へのサポートの方法を判定しています。また、大学院生には「DET」という別のテストが用意されています。これらのテスト結果を踏まえ、6,500人以上の学生がCELCの提供する、基礎英語、アカデミック英語、ビジネス英語等、多彩な英語の授業を受講しています。

CELCでは授業だけでなく、Self-access English Learning Facility(SELF)と呼ばれる、学生の自主的な学習環境の整備も行っています。SELFの部屋には、書籍、雑誌、映画のビデオやDVD、自分のペースに合わせて文法やライティングスキルを向上できるテキストブックやワークシートなどがそろっています。ここにはスチューデントアシスタントが常駐し、利用者を手助けしてくれます。今回、このスチューデントアシスタントがわれわれにSELFの

案内もしてくれました。また、SELFのオンラインバージョンITSELFもあり、インターネットでいつでもどこからでも自主的学習ができます。

このセンターは学生へのサービスだけではなく、教員へのコンサルテーション、スタッフセミナー等も行っています。効果的な英語教育についてのシンポジウムやオンラインジャーナル English Language Teaching World Online(ELTWO)の発行など研究活動も非常に活発に行われています。

CIT

最後にCITを訪れ、Associate DirectorのLIM SEW HOO氏が対応してくれました。このセンターは、40人ものスタッフがおり、授業に役立つ非常に多彩なe-ラーニングを提供しています。

まず、CMS(Course Management System)に関しては、BlackBoardとよく似たインターフェースの「The Integrated Virtual Learning Enviroment(IVLE)」というシステムをセンターで開発して使用していました。IVLEは90%もの教員が使用しているそうです。特に有効活用している教員は、「Breeze DIY coueware」を利用して授業の教材を作成し、IVLEにアップロードしています。これを利用すると、授業で使用したパワーポイントなどのスライドに音声や選択ボタン等を付けたり、小テストなどのインタラクティブな教材を作成したりできるそうです。

さらに、授業のWeb公開「NUS on YouTube」も非常に活発に活用されています。このセンターのスタッフや非常勤のカメラマンにより、週60時間



写真1 CELEでのミーティング

写真2 開放的な学生食堂

もの授業が撮影され、公開されていました。

また、新しい試みとして「questionSMS」というシステムが始められています。これは、授業を中断することなく質問を受けつけるために用意されたもので、学生はWeb上で質問したりアンケートに答えることができ、教員はリアルタイムでそれをパソコンで見ることができます。

CITのe-ラーニングは常に進化しています。われわれが訪問した期間にもe-Learning Weekとして、ビジネススクールのほとんどの授業をWeb公開していたり、CITのブログで利用法などが常に更

新され、新鮮さが色あせない工夫がされています。

このように、シンガポール大学では、学力分けのための試験を行い、それに対してバラエティー豊富な英語のスキル向上のための授業を揃えています。また、常に新たなe-ラーニングを試み、それをブログで紹介しています。1つひとつのサービスがバラバラに存在するのではなく、一連の流れとなつてきめ細かなサービスをなしている印象を受けました。学生にも教員にも利用してもらえるサービスを構築する上でとても見習う点が多いように思います。(山田 邦雅)

九州大学を訪問して

本学高機能センター、学務部教務課の教職員7名は、3月9日、九州大学箱崎キャンパス・伊都キャンパスへ視察に行ってきました。

九州大学では、入試、IR、学生支援について貴重なお話をうかがい、素晴らしい施設を見学させていただくなど、充実した視察となりました。

午前中に訪れた箱崎キャンパスには、伝統を感じさせる重厚な建物が立ち並んでいます。北大の一行は、はじめに入試関連について、アドミッションセンター林篤裕教授にお話をうかがいました。

九州大学では、入学前・入試・初年次・専門科目成績の相関について研究がなされています。入試から専門教育までの学生の成績推移を分析して、例えばAO入試など多様な入試・カリキュラムでの学生の傾向把握に使用されています。

また学部横断型教育プログラム「21世紀プログラム」では、学生は4年生になって指導教員を決めるまで、幅広い分野を学ぶことができます。学生の意欲も高く、特段のフォローはなくても、活発に学習しているとのことでした。



写真1 キャンパス・モール



写真2 学生生活・修学相談室受付

次に訪問した大学評価情報室は、比較的小さな建物にありましたが、九州大学での評価・マネジメントに関する情報収集・分析を担う部局です。大学評価情報室高田英一准教授のお話では、九州大学教員の研究者情報は、大学評価情報室において検索システムとして集約・管理されます。その情報の一部はウェブ上でも公開されています。また、「大学評価担当者集会」や「大学評価コンソーシアム」を通じて大学間連携にも取り組まれています。

午後から訪れた伊都キャンパスは、主に1年生が全学教育を受けるキャンパスで、2009年に六本松キャンパスの機能を移転した新しい地区です。

キャンパス・モールと呼ばれる広々とした歩道の両脇にセンター1号館・2号館(全学教育施設)が向かい合っています。センター1号館にある「学生生活・修学相談室」を訪問しました。

相談室の雰囲気には、パステル調にやさしく彩られた室内や、やわらかい曲線を使った部屋の設計など、相談者への配慮が感じられました。この相談室では、臨床心理士の資格をもつ先生方によるカウンセリングの他、新入学生サポート制度や、学習サポート制度、ピア・アドバイス活動といった幅広い学生支援活動を展開しています。これらの活動について高等教育開発推進センター福留留美准教授と学務部全学教育課道脇健氏から説明を受けました。

新入学生サポート制度は、各学部から推薦され

た24人の2年生のサポーターが1年生の相談に応じるもので、2009年4～7月まで行われました。相談内容は履修や修学に関するものが多く、開催当初の4月9・10日は400人近くの利用があったそうです。全期間の合計利用者は748人でした。

学習サポート制度は、大学院生が1・2年生を対象に理系基礎科目の指導・アドバイスを行うもので、2009年10月～2010年2月まで行われました。サポーターは修士課程の学生19名、博士課程の学生2名の計21名で、公募により決定されました。この制度の利用者は月15人程度で、全期間の合計利用者は75人でした。

ともに2009年度から開始された制度ですが、初年次の学生の学習・修学を支援する効果的な活動だと思います。この2つのサポートは、来年度も継続するとのことでした。

また、学生が学習などで利用できるスペースも見せていただきました。相談室に併設されている情報学習室ではPC約20台と、数人で歓談できるテーブルが設置されていました。

圧巻だったのは、センター2号館4階にある広大な自習スペース「^{オウマイ}嚶鳴天空広場 "Q-Commons"」です。ここには数台のMacと、学習に使えるようかなりたくさんの座席が用意されており、多くの学生が利用できるようになっていました。

(日吉 大輔, 岡崎 裕剛, 斉藤 準, 竹山 幸作)



写真3 学習サポート室



写真4 情報学習室

北海道大学オープンコースウェア

高等教育開発研究部 特任准教授 合川 正幸

オープンコースウェア (OpenCourseWare: OCW) は、高等教育機関がインターネットで講義情報 (シラバス, スケジュール, 講義資料等) を無償で公開する取り組みです。この活動は、米国マサチューセッツ州工科大学 (MIT) が高等教育における知識の公開・共有の方法として 2001 年に開始しました。OCW はその後、MIT に留まらず、米国のほかの大学を始めヨーロッパやアジアなど世界中に広がり、現在 100 を超える大学が実施しています。

北大は 2006 年 5 月に北海道大学オープンコースウェア (HU-OCW) として講義資料の公開を開始しました (<http://ocw.hokudai.ac.jp>)。ここで公開している講義資料などによって、北大で行われている講義や教育活動について知ることができます。HU-OCW により、1) 知識の社会への還元 (社会貢献), 2) ビジビリティの向上 (広報効果), 3) 講義資料および講義自体の質の向上 (教育改善) が期待されています。

HU-OCW は開始後順調に公開コース数を増やしてきて、2010 年 1 月末現在、正規科目 89 コースを公開しています。この中には他大学の教員が北大で行った特別講義の資料があります。このような特別講義は他大学の講師を迎えている上、短期間に集中して行うため、受講生が十分な予習、復習をすることが困難ですが、講義資料を HU-OCW で公開することで、受講後の復習材料や翌年度以降の参考資料にすることが可能になります。

また、いくつかのコースでは映像コンテンツも講義資料として公開しています。特に実習や実験においては、受講前に概要を知ることができるほか、復習の材料としての効果も期待できます。



写真 1 北海道大学オープンコースウェア Web サイト (<http://ocw.hokudai.ac.jp>)

HU-OCWでは、北大の教育活動をより広く、分かりやすく伝えるという観点から、正規科目以外にも公開講座やオープンキャンパス、北海道大学プロフェッサー・ビジット（朝日新聞社共催）、ひらめき☆ときめきサイエンス（独立行政法人日本学術振興会共催）など、学外の方々を対象とした取り組みも映像で収録し、公開しています。またこれらの映像は、Apple社のiTunes Storeへの掲載や、北海道内全高校へのパンフレット配布などの方法で紹介しています。さらに大学文書館の協力のもと、北海道大学に保管されている古い講義資料のデジタル化も行っています。明治時代に記録されたクラーク教授の講義ノートなどは、北海道大学の教育史を振り

返る上で重要な資料です。

HU-OCWではこのように、コンテンツの拡充を積極的に行い、より多くの方々に北大の教育活動を紹介しています。その結果、HU-OCWへのアクセス数は増加を続け、情報基盤センターに設置したメインサーバと北京オフィスに設置したミラーサーバの合計で月間約19万ページビュー(2010年1月)、累計では約391万ページビューとなり、多くの方々に利用されていることが分かります。

今後も正規科目の講義資料や公開講座等の映像等各種コンテンツの拡充につとめ、北海道大学の教育活動を広く伝えると同時に、学生による利用促進にむけて取り組んでいきます。

クリッカーの1ユーザーとしての感想

大学院環境科学院 准教授 豊田 和弘

私は本学の貸出しクリッカーのカジュアル・ユーザーです。大人数講義への支援機器として名高い「クリッカー」ですが、対象人数が二十名前後でも私は大変重宝しています。私の場合、スクリーン表示した質問・アンケートへの回答分布をスクリーンに即時表示するという機能のみを使用しています。なお、出席簿の登録や成績の記録等の機能のある、全学教育でCDとして配布されているソフトについては私は未経験ですので、自分をカジュアル・ユーザーと称したのはそういう意味です。

国際コミュニケーション法という大学院での講義で、学術論文中での動名詞と不定詞の使い分けについて説明をしていたときのことです。「Seeing is Believing」と「To see is to believe」とでは格言としてはどちらが適当か、またそれはなぜなのか、というように日常生活で使用されるような文章をいくつか例にあげて、その意味の違いを説明すると、受講生の大半は、わかっているよ、という顔つきで聞いていました。そこで次に科学論文中にあるような文例中で動名詞と不定詞のどちらが適当か、という2択問題をスクリーンに表示して、クリッカーで受講生にその回答を選択させ、その回答分布をスク

リーンに出すと驚いたことに、9割の受講生が間違った方を選択したのです。正解はこちら、と私が指さすと、受講生もびっくり。そこでもう一度、動名詞と不定詞とのニアンスの相違を説明し、1問目の解答理由を解説して、2問目、3問目と同様な問題を繰り返すと、だんだんと正解率が上がり、5問目ではほぼ全員正解となりました。十数名の受講生の半数は留学生であるため、all in Englishでおこなったので、私の英語が不明瞭だったのが原因だったのかもしれませんが、クリッカーが受講者の理解を完全にしてくれたわけです。

私の所属は、改組で誕生してまだ5年目の環境起学という専攻で、学部生は存在せず、北大以外の多様な分野と異なる学部から進学してきた院生が大半です。専攻内ではいくつもの課題ゼミが混在しており、どのように運営するかは参加者、教員と院生とで相談しながら決めている状態です。しかし、多様な背景をもつ二十数名もの参加者が新たに決まり、その中でみんなが最も満足する運営方針を決めるのは大変です。反省会で一人一人順番に感想を言ってもらっても、はっきり意見を言わない院生も多く、時間もかかり、数名の留学生は日本語がわからず疎

外感を感じたようでした。そこで、今度はクリッカーを使って、今年度のゼミ運営についての感想のアンケートをとりました。パワーポイントで示す質問は日本語と英語を併記しました。すると十数分で、ゼミの開催日時、内容、自分の研究テーマや他の課題との兼ね合いなどについての意見の全体像を、留学生を含む全員で共有することができ、次年度の運営に必要な確かな指標を短時間で得ることができました。このように、特に留学生も参加している場合に、クリッカーの使用はより有意義であると実感しました。

さらに、クリッカーを使用してアンケートを取ると、従来のアンケート用紙の配布と回収による結果と比較して、アンケートの結果の信頼性が高まるのではないかと感じています。たとえ無記名でも、アンケート用紙に記入する場合には、人目を気にするあまり不本意な回答をする傾向があるのではないのでしょうか。一方、「クリッカー」によるアンケートだと、仮に他人には知られたくない様な選択肢のボタンを正直に押した後にすぐに、自分と同じ仲間が結構いることが判ることも多く、気分的に安心でき、他人の意見の分布を理解することができます。アンケートに回答するというのは面倒で億劫な作業なのですが、「クリッカー」を使うとアンケートを回答する方も楽しくなり、作成する方も安心です。

本学で「クリッカー」を使用する上での手間もたいしたことはありません。事前に登録すれば、講義の直前に当センター全学教育事務室にて、小さな受信 USB 端末 1 つと「クリッカー」が受講生の人数分入ったバッグを借りて、教室に運び、「クリッカー」を参加者に配り、使用が終わったら全部回収して事務室に返却するだけです。私の使用法の場合、Keepad 社のホームページから TurningPointAnywhere というソフトをダウンロードした MacBookAir を現場に持参して、借りた受信 USB 端末を付けて、そのソフトを起動したら、パワーポイントで質問と選択肢をスクリーンに映

し出し、受信 ON をクリックして受講者からの回答を受けつけます。必要な回答数が得られたら受信 OFF をクリックすると回答分布が表示されます。その分布表示を消して次の問題をスクリーンに映し出す、という一問当たりたったの 3 クリックで連続使用できます。この回答分布の表示はワードやパワーポイントの使用と同時にできますし、受信できないなどのトラブルには私はまだ遭遇したことはありません。

最後に、「クリッカー」の限界について紹介します。基礎化学 1 という講義で「クリッカー」を使って問題演習をしたことがあるのですが、受講者は七十名ほどいるのに、その時に割り当てられた教室は縦長で、プロジェクターが暗く、2 回程使用しただけでやめてしまいました。物理化学という科目の性格上、設問の文章はどうしても長くなることが多く、表示される文字は小さくなり、教室の後ろにいた学生は問題を読めないことも多かったと思います。大学での講義の目的は、学生が自分で考える事ができるようにすること、およびそのためのスキーマ（構造化された知識）を頭の中に構築できるように助けること、と私は理解しています。単純な理論や基本的な概念を学生が理解したか記憶したかどうかを確認する時に「クリッカー」はすばらしい威力を発揮します。しかし、新しく学んだ理論や概念を組み合わせて論述したり結果を算出したりできるようにするためには、従来通りに黒板で演習を行ったり、レポートなどを宿題として課して考えさせることも、やはり必要だというのが私の感想です。

平成 22 年度もクリッカーの貸出しを行います。全学教育科目の予約に空きがある場合は、専門科目にも貸出しますので、お問い合わせください。

詳しくは以下の WEB ページをご覧ください。

<http://socyo.high.hokudai.ac.jp>

(山田 邦雅)

生涯学習 LIFELONG LEARNING

平成 22 年度北海道大学公開講座のキーワードは「変化」

毎年7月に全学が協力して開催する北海道大学公開講座のメインタイトルと講師が2月23日に開催された平成21年度第3回生涯学習計画研究委員会で決まりました。

平成22年度のメインタイトルは「『変化』を見つめるー私たちや地域の未来のためにー」で、「変化」ないしは「change」をキーワードにそれぞれの研究領域からアプローチを試みるものです。講師としては、石森秀三観光学高等研究センター教授、片倉

晴雄理学研究院教授、工藤峰一情報科学研究科教授、亀野淳高等教育機能開発総合センター准教授、川口暁弘文学研究科准教授、白岩孝行低温科学研究所准教授、遊川和郎メディア・コミュニケーション研究院准教授、吉田徹法学研究科准教授が担当することになりました。7月1日(木)～29日(木)の月曜日と木曜日の午後6時30分～8時30分、情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室を会場に全8回に渡って開催されます。(木村 純)

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

フィンランドの教師の視点～明日の発達水準～

フィンランドは、OECDが3年に一度実施している15歳児を対象にした国際学力テストにおいて学力世界一を維持し続けています。その大きな要因の一つは優れた教師とその養成方法にあることが指摘されています。フィンランドの教師は実践的研究者であることが求められ、そのためにクラス担任課程(日本の小学校教員)では5年間に渡り20週以上の教育実習が課せられています。ではフィンランドの教師は実践的研究者として、子どもたちの何を観察しているのでしょうか?観察したものが研究と教育実践のベースになっているはずです。そしてこの基本的な疑問に答えることは、日本の教育を見直す上でも大事な視点になると思います。この疑問に答えるべく、昨年の大学入試の調査に引き続き、フィンランドのオウル大学教育学部教員養成・教育科学部門を訪問し、教員および院生たちとディスカッションをするとともに、付属総合学校(フィンラン

ドは小中一貫)における先進的な授業を見学してきました。

フィンランドの教師が子どもたちに見ているものは「明日の発達水準(Zone of Proximal Development:ZPD)」です。これはロシアの教育心理学者であるヴィゴツキーが提唱した考えです。日本では、教授・学習によって子どもたちが現在までに習得した知識や技能という「今日の発達水準」がテストによって測られます。しかし子どもたちは教育によって伸びる可能性を秘めています。この伸びしろ、すなわちZPDを観察し、そのための教育を行うべきだというのがヴィゴツキーの考えです。しかしZPDは子どもにより異なります。その子どもたちの多様なZPDを見極める大事な方法が教科・科目横断型授業です。例えば、算数と国語の融合授業であれば、算数が苦手な子どもでも国語が得意であれば、国語の視点から算数の発達水準を引

き上げる可能性が見えてきます。附属総合学校ではこのような授業の新しい取り組みが大学との連携により多数行われています。写真が見学してきた1, 2年生合同の授業です。中央のテーブルには子どもたちが作成した城の模型があります。その真後ろの黒板にその平面図形が、その右側には城の立地条件や取り巻く環境、城の備品、そこでの人々の生活などについて子どもたちが調べたり考えたりしたことがメモとして貼付けられています。この授業は算数と国語と理科の融合授業です。まず城の平面図を描き、模型を組み立てるために、長さや角度を測るといった算数の能力を習得します。そして城の立地や取り巻く環境を考えることで、海や山、牧草地といった自然環境にまつわる言葉とその使い方を習得します。これが国語です。そして自然環境で生きる動物や植物、城で生活する人々を考えることは理科の授業になります。このような教科・科目横断型授業により、子どもたち一人一人が自分の知識や能力を発揮できる場を設け、子どもたちの個々の伸びしろを教師は測り、それぞれの子どもたちに合った教育支援を行おうとしているのです。

このような将来への伸びしろを見ようという姿勢は教育システムあるいは社会の中にも見られるように思います。例えば、フィンランドの校長先生は若い人が多いようです。これは教師も校長先生もそれぞれ独立した専門職だからであり、校長先生になるために教師のキャリアが必ずしも必要とされるわけではないからです。そして政治家、特に大臣クラスも若いと思います。例えば学力世界一と言われる現在のフィンランドの教育を築いたオッリペッカ・ヘイノネン氏は中学教師から教育大臣補佐官を経て、30歳で教育大臣になっています。これらのことは社会全体が将来の伸びしろを常に見ているからではないかと思います。対する日本。校長先生の多くは定年間際、政治家に至っては一般社会の定年年齢のはるか上の方々が幅を利かせています。確かに、今日の発達水準だけを見ていれば、歳を取った方々に知識や人脈では敵わないかもしれません。でも明日の発達水準を見た場合はどうでしょうか？日本はまだまだフィンランドの教育から学ぶことができるように思います。(池田 文人)



写真1 城を題材にした算数・国語・理科の融合授業の一場面

センター日誌 CENTER EVENTS, December - February

12月

- 1日・(会議) 第5回学生会委員会
- 1日～2日
 - ・(行事) 国際化加速FD
- 3日・(会議) 第47回生涯学習計画研究委員会
 - ・(会議) 第78回全学教育委員会
 - ・(会議) 第2回戦略連携IRシステム部会(TV)
- 3日～25日
 - ・(アンケート) 戦略連携「一年生調査2009年」
- 7日・(会議) 入学者選抜委員会
 - ・(会議) 北海道地区FD・SD推進協議会幹事会幹事会
- 8日・(行事) AO入試(大学入試センター試験を課さない学部・学科)合格発表
 - ・(行事) 帰国子女入試合格発表
 - ・(会議) 「文系基礎科目」検討WG
 - ・(会議) 平成21年度第5回センター運営委員会
- 9日・(会議) 大学院共通授業検討専門委員会
- 9日・(説明会) 広島県尾道北高校に対する大学説明会(プロフェッサービジット企画)
- 11日・(会議) 第3回戦略連携IRシステム部会(TV)
- 14日・(会議) 第54回教務委員会
- 11日～17日
 - ・(行事) AO入試入学手続(大学入試センター試験を課さない学部・学科)
 - ・(行事) 帰国子女入試入学手続
- 18日・(会議) 第13回生涯学習計画研究委員会北海道大学公開講座実施部会
- 18日・(来訪) 同志社大学
- 21日・(来訪) お茶の水女子大学
- 24日・(会議) 第8回教育改革室会議
 - ・(会議) 第4回戦略連携IRシステム部会(TV)

1月

- 13日・(会議) 第5回戦略連携IRシステム部会(TV)
- 16日～17日
 - ・(試験) 大学入試センター試験
- 19日～21日
 - ・(来訪) NEXSによる訪問調査

- 22日・(来訪) 流通科学大学
- 26日・(会議) 「文系基礎科目」検討WG
- 27日・(会議) 第6回戦略連携IRシステム部会(TV)
- 28日・(談話) 平成21年度第1回遠友学舎炉辺談話
- 28日・(会議) 第9回教育改革室会議
- 30日～31日
 - ・(試験) 大学入試センター試験追試験

2月

- 2日～3日
 - ・(行事) 戦略連携IRシステム部会ワークショップ(TV)
- 4日・(談話) 平成21年度第2回遠友学舎炉辺談話
- 4日・(行事) ICT活用セミナー
- 8日～11日
 - ・(調査) シンガポール大学
- 9日・(会議) 入学者選抜委員会
- 10日・(行事) AO入試合格発表(大学入試センター試験を課す学部・学科)
 - 第1回戦略連携学生調査部会
- 12日～15日
 - ・(行事) AO入試入学手続(大学入試センター試験を課す学部・学科)
 - ・(会議) 第14回生涯学習計画研究委員会北海道大学公開講座実施部会
- 12日・(会議) 第7回総合教育部教育課程等編成WG
 - ・(談話) 平成21年度第3回遠友学舎炉辺談話
- 15日～24日
 - ・(調査) カリフォルニア大学バークリー校
- 16日・(会議) 平成21年度第6回センター運営委員会
- 17日・(会議) 第7回戦略連携IRシステム部会
- 18日・(会議) 試験場部会
- 19日・(会議) 第150回全学教育委員会小委員会
- 22日～28日
 - ・(調査) インディアナ大学ブルーミントン校, シカゴ大学
- 23日・(会議) 第48回生涯学習計画研究委員会
 - ・(会議) 教育システム弾力化検討専門委員会
 - ・(会議) 第6回学生会委員会
- 24日・(会議) 第10回教育改革室会議
- 25日・(試験) 一般入試(前期日程)第2次入学試験

行事予定 SCHEDULE, April - June

	【日(曜日)】	【行事】
4月	2(金)～7(水)	新入生定期健康診断
	7(水)	新入生オリエンテーション及び学部ガイダンス
	8(木)	入学式
	9(金)	学部ガイダンス
	12(月)	第1学期授業開始日
	12(月)～16(金)	抽選科目の申込期間(Web入力)
	20(火)	抽選科目の結果発表日及び追加申込日
	21(水)～27(火)	平成18～22年度入学者履修届Web入力
	21(水), 22(木)	平成17年度以前入学者履修届受付
	6月	3(木)
3(木)～6(日)		大学祭[3(木), 4(金)は休講]
9(水)～11(金)		履修登録した科目の取消し受付

センターニュース 2010, No. 82 目次

＜巻頭言＞コアカリキュラム・基礎教育・単位の実質化・FDの今後 安藤 厚..... 1	UC パークリーでの GSI 制度 14
学生同士のピア・サポート 岡本 健..... 4	インディアナ大学における学習・教育支援 16
学習サポートのお知らせ 6	シンガポール国立大学訪問記 18
全学教育委員会報告 (第 79 回) 7	九州大学を訪問して..... 20
全学教育の科目責任者・クラス担任からひとこと 有川 二郎..... 10 有田 正志..... 11 谷野 圭持..... 12 得津 晶..... 12	北海道大学オープンコースウェア 合川 正幸..... 22
2010 (平成 22) 年度 全学教育部行事予定表 13	クリッカーの 1 ユーザーとしての感想 豊田 和弘..... 23
アイヌ語・アイヌ文化の授業に思うこと 北原 次郎太 14	平成 22 年度北海道大学公開講座のキーワードは「変化」 25
	フィンランドの教師の視点～明日の発達水準～..... 25
	センター日誌・行事予定 27
	目次・編集後記 28

編集後記

先日、中国へ調査に行った。主な目的は、大学生の就職難とそれに対する大学の支援の状況把握についてである。

経済発展を続ける中国であるが、大学生の就職難については、最近、日本のマスコミでもたびたび取り上げられており、ご存じの方も多いのではないだろうか。

こうした状況の中で、中国の大学では、学内に就職指導センターを設置し、就職支援を行っているようである。また、初年次からのキャリア教育の重要性を認識し、キャリア教育に関する科目を開講している大学もあった。しかし、こうした取組みは緒に就いたばかりであり、逆に私の方が日本の状況を質問されたりした。

今後、アジア圏の大学の連携がより緊密になる中で、研究や教育だけではなく、様々な分野での連携がより重要になりそうである。(かめ)

センターニュース 第 82 号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2010 年 3 月 25 日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター
〒060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
電話 (011)706-7520・FAX (011)706-7854

編集委員：西森敏之・◎細川敏幸・山田邦雅・安藤厚
木村 純・川初清典・亀野 淳・三上直之
山岸みどり・鈴木 誠・池田文人

ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ：

<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>